

# 博士学位論文審査要旨

2015年1月7日

論文題目： 西田哲学がビラン哲学にもたらしうるもの

学位申請者： 鋳物 美佳

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 庭田 茂吉

副査： 文学研究科 教授 宮庄 哲夫

副査： 文学研究科 教授 林 克樹

要旨：

本論文はメーヌ・ド・ビラン哲学によって開かれた問題圏の延長上に西田幾多郎の哲学を位置づけ、西田の哲学がビラン哲学の中心に位置する意志的運動に何をもたらしうるかを論じたものである。ビラン哲学の特徴は何よりもまず、意志的身体運動の中に、私が私自身を直接的に覚知する原初的事実を発見し、そのことによって運動の主体である私自身を直接捉えることに成功した点にある。しかし、この功績は確かに哲学の歴史においてきわめて大きなものであるが、同時にそこにはビラン哲学にとって容易に解決しがたい困難も認められる。すなわち、意志や意図を欠いた受動的経験と意志的、意図的な能動的経験との対立である。それゆえ問題は、自我におけるこの能動と受動との対立をいかにして乗り越えるかである。本論文では、このビラン哲学の困難の中に、西田の後期思想、すなわち、私が私を知る瞬間を更に深めた、その瞬間の「於いてある場所」の考え方を導入し、この問題を解決へと導いた。

本論文は、「はじめに」、第一章「能動性の領域の画定」、第二章「能動と受動のあいまい」、第三章「直接的覚知と自然発生性の関係」、第四章「直接的覚知と自覚」、そして「おわりに」からなる。第一章では、ビラン哲学が概観され、私が私を直接的に知る瞬間に至る過程が取り上げられる。第二章では、ビラン哲学の困難が示され、ラヴェッソンの解決策が検討されるが、その難点もまた明らかになる。第三章では、西田の解決策が示され、ビラン哲学をめぐって、ラヴェッソンと西田の違い、すなわち非連続の連続という論点が提示される。第四章では、これまでの議論の整理と総合が試みられ、ビラン哲学への西田の決定的な寄与が論じられる。そして、結論として、ビランと西田は問題を共有し、一部差異は認められるものの、ビラニズムは西田哲学によって補完される旨が主張される。

本論文の意義は、明確な問題意識のもと、これまでさまざまに論じられてきたビラン哲学の能動と受動をめぐる困難に対して、西田の後期思想の立場から解決を試み、見事に成功した点にある。ビラン研究を進める上で、参照されるべきすぐれた論文である。よって、本論文は、博士（哲学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2015年1月7日

論文題目： 西田哲学がヒラン哲学にもたらしうるもの

学位申請者： 鋳物 美佳

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 庭田 茂吉

副査： 文学研究科 教授 宮庄 哲夫

副査： 文学研究科 教授 林 克樹

要 旨：

上記審査委員は学位申請者鋳物美佳氏に対する総合試験を2015年1月7日午前10時から2時間実施した。

総合試験において、学位申請者は、提出された論文の内容および関連事項に関する口頭試問に対して、適切に対応し、論文の意義とその研究水準の高さを示すとともに、主題の背景となる哲学史的理解や現代の哲学的課題についても、広範な専門的知識をもちあわせ、深い教養をそなえていることを証明した。

また、語学試験（フランス語、英語）においても、学位申請者が研究上要求される外国語文献の読解能力を十分に有していることが証明された。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目： 西田哲学がビラン哲学にもたらしうるもの  
氏名： 鋳物美佳

要旨：

本論文の目的は、メヌ・ド・ビラン哲学が開いた問題圏の延長線上に西田幾多郎を位置づけること、および西田哲学がビラン哲学に対してどのような展開をもたらしうるかを、ビラン哲学の中心的主題のひとつである意志的運動を中心に論ずることである。

ビランは、自己目的化された運動の中に、私が私自身に気付く、私が私自身の存在を直接的に知る機会を見出した。彼は、運動という現象を、運動する本人の主観的視点から捉え直すことで、哲学的には、対象化以前の動的な私についての直接的な知を捉えることに成功した。すなわち抽象的ではない具体的私の把握である。また他の分野においても、ビランの企図は、運動を自己同一性の回復に役立てようとする今日の心理療法や運動理論の先駆的見立てであるといえるだろう。

しかしながら、そのようなビラン哲学は、今日多く研究されているとは言えない。その理由としては、まずビランの死後の草稿紛失や、不完全な著作集が長年刊行されていたことによる、文献的な未整理が挙げられる。しかし問題は文献だけではない。今世紀に入って、現在望みうるかぎりではほぼ最善のかたちで新たな全集が刊行されたにも関わらず、未だにビラン研究はフランス哲学研究において、日の目を見ていない。やはりビラン哲学研究の不振のひとつは、ビラン哲学自身に内在する問題に多く依っているように思われる。今日のわれわれにとって、ビランの提示する能動と受動の二分法は、あまりに単純で、体系的すぎるのである。

とはいえビランの用いた方法が単純であるとはいえ、その俎上に載せようとしていた主題までも棄却してしまうのは、既に述べたビラン哲学の先見性からして、残念に思われる。ビランの文献ではなく、ビラン哲学の精神を追うことで、今日的な形でビラン哲学を復権させることができるのではないだろうか。

このような目的のため、本論では、ビラン哲学の延長に西田哲学を位置づける。ビランも西田も両者ともに、私が私について知る瞬間を、抽象的思弁によってではなく、具体的経験に基づいて追究した。二人の哲学的関心はきわめて近かったと言えるだろう。実際に西田は若い頃からビランを読んでいて、そのうえ西田は、とりわけその中期以降、後期の思想において、私が私について知る瞬間だけでなく、その瞬間が於いてある場所を、深く考察の対象に入れるようになった。ならばビランにおける能動と受動の単純な二分法を補完する思想が、西田の中に見出されるのではないだろうか。そしてもしそれが可能であるとするなら、そのような西田的解釈は、どのような意味で、どれほどまでビラン哲学を掘り下げることができるのか。以上のような視点を踏まえたうえで、西田哲学がビラン哲学にもたらしうるものを論じることが、本論の主旨である。

論文は、四章で構成される。第一章ではビラン哲学の限界が示され、第二章ではビラン哲学とラヴェッソン形而上学の比較研究が行われる。第三章は、西田幾多郎によるラヴェッソン読解が扱われ、第四章では、ビラン哲学と西田哲学との比較研究が論じられる。しかしいずれの章も、継起的に生じる問題を追うのではなく、むしろ第一章から第四章にかけて、同じ問題を追求してゆくように構成されている。以下は各章の概要である。

第一章では、ビラン哲学の体系が概観される。すなわち、ビランの哲学的企図を確認したのち、

ビラン哲学の前提となる諸概念を見、ビランがいかなる点において、その先駆者たちを批判し、超克したかを論じる。そのうえで、ビラン自身の立てた、私が私に気付く瞬間、ビランの言葉でいえば、直接的覚知に至るまでの過程が整理された形で提示される。

ビラン哲学の企図とは、私という主体にとって否応無しに現れる気分などの受動的経験に対して、私はどこまで自分の力を発揮することができ、領域を確保することができるのか、を画定するところにある。したがって私の能動性の画定が、ビラン哲学を読み解く鍵として示される。ビラン哲学の体系を概観する中で、能動性の画定は次のように示される。すなわち努力としての私が私の身体という抵抗に遭遇することによって、自分自身を照らし出し、自分自身を知ることである。この努力と抵抗の遭遇は、もちろん意志的運動においてなされる。

第二章は、ビラン哲学の限界を示すところから始まり、ついでラヴェッソンによるその解決を示し、最後にビランとラヴェッソンを統合的に見ることの困難に照らし出して、ビランとラヴェッソンそれぞれの困難を指摘する。

ビラン哲学の限界とは、すでにのべた能動と受動の二元論である。このためにビラン哲学は、能動性としての私という画期的な視点から出発したにもかかわらず、ビラン哲学の枠の中だけではすぐに暗礁に乗り上げてしまう。なぜなら、ビランは能動性としての私を措定するにも関わらず、一方で生命体の根源の様態として受動性を挙げているからである。そこからは、受動的経験のうちからいかにして能動性が生じるのかという問いが不可避免的に生じるが、ビラン哲学のなかに十分な答えはない。

そこで、ラヴェッソンの『習慣論』がビラン哲学の補正的要素として読まれる。能動と受動のあいりとしての習慣を深く考察したラヴェッソンを参照すれば、能動と受動の推移の問題は解決される。

しかしラヴェッソンは、もともとのビランの争点であった私が私に気付く瞬間、連続的日常的経験における非連続の瞬間に、あまり関心がない。ラヴェッソンの説く世界はすべてが生命に基礎付けられた合目的世界であって、断絶がない。したがって、ラヴェッソンはビランにとって補完的要素を提供するが、そのラヴェッソン形而上学自体が、ビラン的観点を欠いていることになる。つぎに問題になるのは、覚知の瞬間と習慣の連続性は、いかにして共存しうるのか、である。

第三章において、西田は、この文脈において、召喚される。最晩年の未完成に終わった論文「生命」の中で、西田はラヴェッソンを入念に追っている。西田は、『善の研究』の形成過程からビランに興味を示し、習慣という現象に注目していた。しかし最晩年にラヴェッソンに出会うことで、ようやく自身の哲学の中での習慣の位置を確かにしたように思われる。第三章では、西田によるラヴェッソン読解を吟味することで、最晩年の西田哲学のなかにビラン的な自覚の瞬間とラヴェッソンの習慣の連続性が共存していることが示される。

最後に、第四章においては、第一章から第三章までを総合的に論じる立場から、ビラン哲学と西田哲学の比較研究が行われる。ここでは、西田がビラン哲学に与えた可能性と同時に、二人の決定的差異、またそこから明るみに出されるビラン哲学の特徴が明らかになる。

西田がビランにもたらした展開は、すなわち自覚する私に対してその「於いてある場所」という視座を与えたことから始まる。その結果、西田はビランの「動く」に「作る」の意味をもたせた。このことは、ビラン哲学の発展として、妥当である。たしかにグイエが指摘するように、ビランにとって私の確実性は、私にだけわかるものであり、普遍化されないものであった。しかしビラン哲学における固有身体とは、私に還元されない最初の「私ではない何か」であって、まさにこの固有身体によって私は否応なしに世界につながっている。その世界とはもちろん一般的普遍的な世界ではなく、西田のいう一回限りの歴史的世界であって、またそのつながり方は、ラヴェッソンのいう習慣によるのである。ビランにおける意志的運動は、ラヴェッソンを経由した西田において、創造に至る。

しかしまさにこの固有身体において、ビランは西田と袂を分かち、西田哲学において私が作る

物は、外的事物であれ私の身体であれ、ほぼ同じレベルで論じられている。しかしビランにとって私の身体は、意志に対して現れる最初の抵抗でありながら、のちには意志に従って外的世界を知るための道具になる点で、外的事物とは絶対的に異なる。西田との比較検討を通してビラン哲学に固有の物として浮かび上がるのは、この中間領域としての固有身体である。

また第四章では、最後に、ここまでの論考で見出された能動的経験としての私が、ビランの最初の企図にどれほど応えることができたかを考察する。すなわち能動的経験は、いかなる受動的経験に対して作用しうるか。ビラン自身の枠に当て嵌めれば、能動的経験としての私は、器官的生命に由来する情感に対して、ある程度有効であることがわかる。しかし西田的解釈を経て、作る意味まで含んだ意志的運動は、器官的生命に由来するものだけではなく、意識的存在である私に訪れる苦悩に対しても、有効であることが示される。